

里山と生命（いのち）のにぎわい

パネルディスカッション



パネリスト

堂本 暁子（千葉県 知事）
手島 芳枝（山武木楽会 農林業家）
ケビン・ショート（東京情報大学環境情報学部教授）
藤倉 清一（（社）千葉県観光協会専務理事）
金親 博榮（里山シンポジウム実行委員会代表・ちば里山センター会長）

コメンテーター

岩槻 邦男

コーディネーター

原 慶太郎（東京情報大学総合情報学部長）

パネラー・コーディネーター

堂本暁子（千葉県知事）

TBS 入社。記者・ディレクターとして報道番組やニュース番組の制作に携わり、1980 年「ベビーホテルキャンペーン」で、日本新聞協会賞・放送文化基金賞・民間放送連盟賞などを受賞。参議院議員として、環境基本法、生物多様性条約、NPO 法、男女共同参画社会基本法、DV 防止法などの立法、審議に深くかかわる。主な著書「生物多様性—生命の豊かさを育むもの」（岩波書店）、主な編著「温暖化と生物多様性」（築地書館）他。

手島芳枝（山武木楽会 農林業家）

山武（さんぶ）木楽（きらく）会会長 山武郡芝山町在住。学校終了後東京で会社勤めを経験。山武郡芝山町の農林業家の手島三知男さんと結婚。父は抑留から帰還後「丸朝出荷組合」を組織し、産業、地域振興を通じた地域住民の生活向上に約 40 年間取り組む。夫は芝山町森林組合長を歴任。平成 18 年森林に関心を持つ地域の女性グループ「山武木楽会」を立ち上げ林業の問題について、考え行動している。会員は林業、椎茸生産者、一般市民、行政職など現在 8 名。

ケビン・ショート（東京情報大学教授）

東京情報大学環境情報学科教授。米国ニューヨーク生まれ、スタンフォード大学大学院修了。専門は文化人類学、民族植物学。1972 年に来日。1987 年から千葉市印西（現印西市）に住み、里山自然のフィールドワークを始める。新聞・雑誌に自然をテーマにしたエッセイを寄稿するかたわら、テレビ・ラジオ、自然観察会や講演活動を通じて、環境教育に積極的に関わっている。主な著書「ケビンの里山自然観察」（講談社/1995）、「ケビンの観察記 海辺の仲間たち」（講談社/1999）、「ドクター・ケビンの里山ニッポン発見記—カントリーサイド・ウオーキングのすすめ」（家の光協会/2003）。

藤倉清一（(社) 千葉市観光協会専務理事）

千葉市若葉区生まれ。千葉市役所に勤務し市民最前線の部門を幅広く経て、後半は農政を担当する。千葉市農政部在職中は生まれ故郷の農業・農村を守っていくと、「いずみグリーンビレッジ構想」の立ち上げや、千葉市第 1 号の里山地区「いずみの森」の指定、間伐材の有効利用や公共建築物の木造化の提唱など、斬新な発想のもと「思い立ったら吉日！」と即行動。破天荒な性格の一方、漬物や菓子などの農産加工品を自ら研究・開発するという繊細さも持ち合わせた性格の持ち主。千葉市農政部長を経て、現職。現在東金市在住。

金親博榮（里山シンポジウム実行委員会代表・ちば里山センター会長）

1970 年大学卒業。1990 年退社後農林業専業となる。1992 年谷当グリーンクラブ・1994 年「わたしの舎」谷当工房開設。千葉市森林組合理事副組合長、印旛沼土地改良区分区長、千葉市いずみグリーンビレッジ推進委員、NPO 千葉自然学校理事、NPO 千葉県市民農園協会理事。

原慶太郎（東京情報大学教授）

東京情報大学環境情報学科教授。総合情報学部長。山形県米沢市生まれ。東北大学大学院修了。専門は景観生態学、環境情報学。1988 年、東京情報大学開学とともに千葉に移り住み、現佐倉市在住。1996-97 年に英国ロンドン大学でカントリーサイド（里山）保全の研究に従事。「生物多様性ちば県戦略」専門委員会委員（副会長）。千葉県環境審議会自然環境部会長。主な著書・訳書「景観生態学」（文一総合出版/2004）、「自然環境解析のためのリモートセンシング・GIS ハンドブック」（古今書院/2007）。

原：

本日、午前中より 22 の分科会発表と、堂本知事と、岩槻先生の講演をお聴きしてきたところで、あらためて、今回のシンポジウムの目的を確認したいと思います。



テーマとなっている「いのちのにぎわい」を、千葉の里山によみがえらせるためには、どうしたらよいかということだと思います。

ここ東京情報大学のある千葉市若葉区は、千葉市と合併した旧和泉町です。都市の近くに農村、里山が位置しており、大学の中にも里山があるような、身近に里山が感じられる若葉区で、100 年先の未来を考えた里山について考えていきたいと思っています。

まずパネラーの方々に、里山とのかかわりを含め、自己紹介をお願い致します。

堂本：

子供のころは東京に居ましたが、郊外に行けば里山があり、疎開で信州にいき、田舎で、ドジョウのいる田んぼで遊び、暖かい九十九里の母方の実家では海で遊んだこともあり、それが原風景としてわたしの中にあります。

手島：

農林業を結婚以来 40 年営んできました農婦でございます。「さんぶ木楽会」という会をしております。ひらがなで「さんぶ」といのは女性のグループですので、やわらかいイメージを出そうということでした。



この会は山武農林振興センターの指導により、山武杉の状況のひどい中、林業に関心を持つ、林家に関する女性が集まり平成 18 年発足しました。

現在会員は 8 名で、こ

の 2 年間は密度の濃い活動をしていると思います。普段の活動は、会員の森林で下草刈り、間伐、間伐材でコースター製作、産業祭に参加して、木材のよさを PR するなどを勉強中ですが、楽しんでやっています。

ケビン：

千葉の里山が好きです。千葉に来て 22 年になります。ナチュラルリストとして個人として里山と付き合っています。これからの里山保全整備をどう進めていくかに深い関心を持っています。

藤倉：

現在は観光の仕事をしていますが、もとは千葉市で農政部長をやっておりました。ちば DC、食と農、食品の流通にも携わりました。

金親：

生まれは佐倉市です。子供のころから農業等を手伝っていました。今は「なりわいのみそづくり」などもやっています。このシンポジウムが始まった当初に、いろいろ話をしているうちに、なんか喋っているのがわたしだけのような感じになって、「お前やれ」ということで、里山シンポジウム実行委員会を行っています。

原：

それではコメンテーターとして、岩槻先生お願いします。

岩槻：



奥里山でイノシシやサルといっしょに育ちました。里山の専門家ではないのですが、生物多様性の観点から考えて行きたいと思っています。

原：

私は山形県米沢市出身で、城下町で育ちました。家のお堀のあとが田んぼになっていて、ホテルもいました。

里山には様々な重要性があるのですが、一般の人にはその認識はまだ弱いと思います。里山の重要性を広めて行きたいと思っています。

千葉の里山・里海・里沼の 3 つが健全に守ら

れることが必要ですが、それには人とのかわり
りが大事であり、今の里山の危機をどうしたら
よいかを議論していきたいと思ひます。

それでは金親会長今年のテーマについて、背
景など説明をお願いします。

金親：

今回が5回目となるのですが、平成15年に全
国植樹祭が千葉県で開催され、これを機に、5
月18日が里山の日とされました。

翌年からこの時期に里山シンポジウムを開催
してきたところです。

第1回のテーマは「里山に託す私たちの未来」
2回「里山と子ども」3回「里山とゴミ」4回「里
山となりわい」となってきました。

今年、生物多様性とのかわりも考えたい
と思ひ、生物多様性では一般の方にわかりにく
いと思ひ「里山と生命（いのち）のにぎわい」
としました。

アンケートで、農林業の大切さを一般の方に
聞いたところ、農村部より都会の住民の方がよ
り大切であると考えているという結果もあるよ
うです。いろいろな「いのちのにぎわい」を考
えて行きたいです。

原：

里山に命のにぎわいがあるためには、そこに
住む人々、外から来る人々を交えたいのちの
にぎわいを、ということでしょうか。

千葉の里山がどのような状態にあるのかにつ
いて、ケビンに一言お願いします。

ケビン：

私はニューヨークで生まれましたが、中学時
代からは、アパラチアの田舎に引っ越した。家



族はそこをカ
ントリーサイ
ドと呼んでい
ました。22年
前千葉ニュー
タウンに來ま
した。足を少
し伸ばすと、

雑木林や畑、田んぼなどがあり、「あー、ここが
日本のカントリーサイドだなー」と思ひました。

日本語でそれはなんと言ひのかを調べていて、
千葉県立中央博物館で、中村先生にお会いし、
「里山」ということばを知りました。里山には、
農業・生き物・林・暮らしがあるが、手付かず
の原生自然には人間の暮らしが薄いです。たと

えば、日本では春に田んぼに水を入れ、そこに
カエルとか小動物がいて、鳥、動物がそれを餌
にしています。ムナグロとキョウジョシギとい
う渡り鳥は、シベリアとオーストラリアを往復
する途中で、日本の水田に立ち寄ります。ヨー
ロッパでは、田んぼではなく牧草地だが、牧草
を刈ると、バッタ等が飛び出して、コウノトリ
などがそれを食べにきて、人家の煙突などに巢
を作ったりしています。また、文化的にも、各
国のそれらの里山風景はその国民の心の奥底に
ある象徴的な存在のようです。

日本のいろいろな地域の里山を歩いています、
面積が狭いのに、日本は里山の風景や、暮らし
方にバリエーションが非常に多いです。日本の
里山は生物多様性も高く、文化的にも持続可能
な暮らし方や精神文化なども豊富、貴重な複合
遺産であるので、これからはしっかりと守らな
ければならないと思ひます。

手島：

結婚して40年。当時、「山に貯金」をしると
いわれて、苗木を植え、手入れをしてきました
が、今は「残高0」です。

昔放置されていた山を、山武杉の溝腐病の対
策事業を県で実施して頂いた10年前に、それを
機会に伐って植林しました。おかげでそこでは、
今、枝打ち、間伐のできる状況にあります。今
やれば1の力で済むものが、放置しておくとい
う状況になってしまうのです。

山に携わって思ひすることは、見ているだけで
ダメ。行動しなくてはいけないということ。今
また0から植林をしても自分の代では伐れませ
ん。孫の代にならないと使えません。が、私の
この年でも山では若い方で、後ろを見ると続
く人がいません。これで千葉県の林業はどうなる
のでしょうか。

原：

山武杉の本場に近い所でもそのような状態
では、他の地域はもっと大変なのではないしょ
うか。

藤倉さんは千葉市で「いずみグリーンビレッ
ジ構想」に携わられておられますが、どのよう
な経緯で行われたのか、また成果や問題点につ
いて教えてください。

藤倉：

自分は農家の長男で、役所に勤めました。行
政じゃなくて農業者の立場だろうと言われたり
したものです。

私がグリーンビレッジ構想に関わりました経緯をお話します。

和泉町は人口 1 万人の町で、千葉市に吸収合併されたものの、農業以外は何も無く、かつ耕作放棄地は増えている状況。千葉市は 50%が農業地域だが、高齢化が進み、荒廃がすすみ、一層農村から人が離れていくという状態で、コミュニティが無くなってしまおうと感じました。



農業生産高をあげる
ことしか、行政は頭に無いが、それ以前に農村集落を維持することが重要です。千葉市の森林面積は約 5100ha だがスギ林のほぼ全部が溝腐病。植林のできる人は 10 人ぐらいしかいません。

そこで、森林ボランティアを立ち上げ、里山を整備していこうとしました。市の職員自ら里山の整備を始めていったら、地域の方が手伝ってくれるようになり、「いずみの森」「ひらたの森」「おぐらの森」(民有林)ができたのです。今、農村がよみがえる千載一隅のチャンス。

里山のみならず食の問題も解決できるのではないのでしょうか。「しよいかーご」(JA の産直の拠点)の盛況などで地元が元気になる。小量多品目の生産が原点。千産千消を木材でもやるのが循環として重要です。なお、いずみ市民センターと白井公民館は木造です。

金親さんから、谷当グリーンクラブを設立した経緯をお願いします。

原：
金親さんから、谷当グリーンクラブを設立した経緯をお願いします。

金親：

谷当グリーンクラブは 14 年前、友人と自然を愛するアウトドアクラブを結成したところから始まりました。昨日は 50 人の子どもと、田植をしました。林業収入はまったくありませんが、コナラ林を整備して、キャンプ場をやったりしています。現在 20 家族ぐらいが会員になっています。

原：

堂本：
生物多様性ということばが、国際的に、政策的に取り入れられたのは、地球サミットに向けて 1980 年代のことだそうで、植物学者の言った専門用語を法律家たちが聞いて条約に取り入れたということです。

私が、「生物多様性」に詳しいから、このたび、生物多様性ちば県戦略を策定した訳ではありません。私が千葉に来てまず一番困ったことは、ゴミ、産業廃棄物の問題です。

堂本：



いろいろな取り組みを伺うとうまくやれそうにも思われますが、分科会発表を聞いているといろいろな難しい面もあるようです。

3 月に生物多様性ちば県戦略を県で公表しているのですが、目的や経緯をご説明をお願いします。

堂本：

私が、「生物多様性」に詳しいから、このたび、生物多様性ちば県戦略を策定した訳ではありません。私が千葉に来てまず一番困ったことは、ゴミ、産業廃棄物の問題です。

銚子では、材木のチップが不法投棄されて、積まれて自然発火していて、フィリピンのスモークマウンテンのようなことが、日本で起きているとは信じられない思いでした。これをなんとかしなければと思いましたが、日本の法律では、ゴミや運送関係の法律には、知事に裁量権がないのです。どんなに大切な場所でも、規制が

できないのです。



千葉のゴミを処分する処理場は必要ですが、不法投棄、県外、東京・神奈川から入ってくるゴミをとめるにはどうしたらよいか。

谷津田の奥に不法投棄をされると、水源があり、水が汚染される可能性もあります。不法投棄の箇所は、山砂採取の跡地等とは違い、道路沿いではないので、上空からだとよくみえるのです。

そうならば、両面からの作戦で行くしかないなど。生態系が壊れている、貴重種の保全のための地区をつくるなど。中央で、県で、ゴミ問題はやっているが、県で、地域を、農業・林業・景観・なりわいの観点でどう保全していくべき

かを検討する必要があります、これにはきちんとしたデータが必要ですが、そこで生物多様性が有効な概念なのです。

アマゾンでは、小さい面積に多くの貴重種がありますが、里山は、千年前から人が入り、人がバッファゾーンをつくり、モザイク的に作ってきたものです。これに急に手を入れなくなると、今のような異変が起こってきます。ゴミのように積極的に壊されてもいます。どこに何の生物がいて、どこを、どのように保全するのか、どうやって里山を守ろうかと思えます。

民間であれ、行政であれ共に、千葉県民のにぎわいをつくると、それぞれにやっていくしかないと思えます。NPO・福祉関係等で、県民参加が根付いてきている中でこの戦略をまとめたので、早くつくることができたように思います。

民間の皆様の活動とあわせて、科学的な知見を交える必要があります。(日本の)行政は科学的な知見を行政のベースに載せるのが下手くそです。アメリカでは議員をアマゾンの視察に連れて行きますよ。日本ではそんな話は聞いたことが無いですね。千葉県立中央博物館は、行政と一緒にやっていくのがいくらか上手のようですが。

里山を守るだけでなく、もっと積極的に若い人も入れて、復活させていくことが必要ですね。

金親：



里山センターで、今年、学生を対象としたプログラムを実施しますよ。

ケビン：

イギリスと日本を比べると大変面白いです。どちらも、大陸の端の島国で、イギリスも日本と同じに昔から里山を作ってきた。

イギリスは、1 万年前は氷の下なので、日本ほど豊かな植生ではありませんが、少ない資源を使って、持続可能な仕組みを作ってきた。そして、里山保全の大先輩でもある。

イギリスの現代里山保護運動は 19 世紀のビートリック・ポーターとピーター・ラビットから始まり、1960 年代から国の基本戦略として

Countryside Conservation (里山保全) が始まった。今、イギリスのシステムを EU がまねしています。

里山の保全は、暮らしの中で守らなければならないから、原生自然の保護よりも難しい。たとえば、田んぼのあぜ道の草刈は一年に 2 ～3 回する。刈った後に、色々な野草が生えてくる。また、虫やカエルが動き出して、イタチやサシバなどの捕獲者がこれをえさにする。ところが、草刈って、大変な重労働！今は農業の高齢化や労働力不足のため、草刈まで手が回らないで畦に除草剤をまいてしまう農家が増えている。勿論、除草剤をまいた畦には野草や小動物が住み着かない。

この「草刈 vs 除草剤」の問題は里山保全における構造的なジレンマを象徴する。解決案として、NPO・ボランティア活動で、農家の人たちの草刈を手伝うとか、佐倉市が谷津田を保全したように、行政が行う方法もあるが、これらの作戦は局地的に短期的に良いかも知れないが、広域的に長期的には限りがある。

世界中で、「草刈 vs 除草剤」と同じような問題が起きている。この問題の基本構造とは、自然に優しい農業は手間がかかり、生産効率の低い農業である。イギリス方式なら、除草剤をまかず草刈をする農家に国からの助成金が出る。イギリスでは、週末に歩く服装をして近くのカントリーサイドを一日歩いて楽しんでいます。多くの国民が自分の里山景観に高いプライドをもち、その大切さを理解しているので、行政も施策を打つことができます。しかし、イギリスと比べると、日本の里山意識がまだまだ足りない。これからは色々な機会を生かして里山の楽しさ、面白さ、そして大切さを多くの国民に理解してもらいたいと思う。



原：

千葉県には里山条例もあり、生物多様性センターもつくられましたが、今後の施策の進め方について伺いたいのですが。

堂本：

千葉県には、ちば里山センターがあり、皆さんで盛り上げてほしいと思います。

国が「里山イニシアチブ」と言っても、里山を守れないのでは仕方がないのです。今、日本の伝統的な人と自然の共生という、精神的、物質的、歴史的価値観を世界に発信し、千葉県でもやっていきましょう。

今年つくられた生物多様性センターだが、生物多様性の法律ができ、他県でも戦略が作られようとしている中で、千葉のセンターがモデルになるはずです。国内に影響を与えることでしょう。是非、いい形で進めて行きたいです。

これは、トップダウンでやることではないです。一人ひとりがそれぞれ情報を持ち合い、また経済的・社会的なことも視野に入れて行なうべきことです。各県のセンターから皆で作ら上げ、国のセンターへ。そこから世界・地球全体の環境問題へ繋がっていくのです。バイオダイバーシティを地域（ローカル）から国・世界（グローバル）へ繋げましょう。

原：

皆さんと共に、世界に発信するセンターとなることを願っています。

（以下質疑応答です。）

質問：

里山の中で、農業が守れないと、里山が守れない。それができる仕組みを作って欲しいです。溝腐病とはなんでしょう？

藤倉：

溝腐病とは、山武杉が特に弱い病気で、地上3~4mの幹にふくらみができてねじれてしまうものです。そうなると、木材としての価値もなくなってしまう。

潜伏期間が20年もあるため、発見した時には手遅れとなることが多いです。千葉市の多くの山武杉も被害にあっています。

2004年当時、農家、都市住民、行政の3者がうまく連携するためには、行政がきちんと住民と向かい合ってやっていくしかありませんでした。

里山の保全是地域連携の証であり、重要な環境教育の場です。林産物も千産千消を行なってください。千葉市内は木造プランターで実践。資源循環する社会にしましょう。

質問：

正月の松飾りの印刷した紙について。どのようにお考えでしょうか。



手島：

日本の文化として、本物の松で作りたいと思うが、県内では松は松枯れで材料が手に入りません。さんぶ木楽会では、茨城の松ではあるが、松飾りを作る研修会を行なっています。今年も行ないたいです。

質問：

農家の生活を守ることが必要。直接支払制度はなかなか実現しそうにありません。

現実的にどうしたらいいのでしょうか。

藤倉：

都市と農村の共生が必要です。都市住民は購入者、農家は提供者というのみでは駄目です。相互理解が必要ですが、農村ではよそ者は入りにくいので、イントロとして行政の介入が必要です。農家は、入口は狭いが懐は暖かいのです。ゆくゆくは、当事者同士の連携としていくのが良いでしょう。

質問：

里山だけでなく、海も視野に入れてはどうでしょうか。

原：

東京情報大学の公開講座で、里山・里海をテーマにしました。浄化槽の性能に関する調査などもあります。

質問：

里山の保全・再生に、企業をどのように巻き込んでいくのでしょうか。

堂本：

企業は、里山に関心がある。千葉銀など大企業や中小企業も。土地所有者と企業の連携については、ちば里山センターが窓口となれます。

また、臨海部の大企業が、工場の緑化率 20% を達成するのが、難しいという問題があった時に、工場の敷地の外で緑化に貢献してもらおうという仕組みも作りました。新エネルギー・省エネルギーの流れのなかで、社員の参加・資金などで、里山づくり・地域づくりに参画しようとする動きが企業でできています。

金親：

臨海部の企業 11 社が、県内で 6 箇所、3 つのタイプの実証プロジェクトを立ち上げる話があります。いずれ、県の HP などでも広報されるでしょう。

質問：

人に害する動物、また、外来種について、根絶やしにするべきでしょうか。

ケビン：

マムシなどの動物も、生物多様性の中では、千葉県の住民である。絶滅させるのは間違いです。どうしたら危険を避けられるのか、子供に教えれば良いのです。安心・安全に里山を楽しむ方法を PR すべきと思います。

岩槻：

生物多様性は、38 億年かけて、今のようになっています。一見害があるように見える生き物でも、生きる意味をもっています。共生とは、その場その場で折り合いをつけていくことです。

外来種でも一概に悪いとは言えないのです。

質問：

県の生物多様性戦略を、どのように市町村におろしていくかが問題です。

堂本：

それには教育が重要。環境基本計画にも盛り込んでいます。

(質疑応答終了。)

原：

最後に一言ずつお願いします。

金親：

各人ができるだけのことを、できるようにやってください。地主・市民のそれぞれの権利と義務を果たしてください。地主との橋渡しは、ちば里山センターへお願いします。

藤倉：

農村が明るく、元気になることが原点です。例えば、孟宗竹の良い竹炭を、千葉市近隣の森林組合長が作ったりしています。ハングリーな行動力で、新しい知恵、発想で上手く資源を活用することが大事です。



ケビン：

千葉県は、歴史・文化・自然が豊か。かつ、近くに都市アメニティも充実しています。この両面を楽しめるのは珍しいことです。千葉県だけかもしれません。もっとアピールしてください。

手島：

一生、森林に関わっていきたいです。子供を巻き込んでいけるといいと思います。

堂本：

市町村に生物多様性の戦略ができてほしいと思います。市へ押しかけて、役所にその担当者を作らせた市民のかたもいるようです。

教育の分野はトップダウンで、生物多様性の副読本を導入するよう、教育庁に指示しています。

岩槻：

生物多様性基本法では、県、市町村は、それぞれ同戦略を作ることになっているので期待し

ています。

里山のボランティア活動は、人々の生活のなかにあるもの。自分たちの物は自分たちできれいにしようという意識をもって頂きたい。コウノトリの事例では、経済的にも効果がありました。中山間地帯は行政が支援する必要がありますが。

「カントリーサイド」は、里地里山のニュアンスがあり、「みどり」のような、二次的自然を指します。バッファゾーンをつくる里山とはニュアンスの違いがあります。

里山を自然に戻すと言って、今、放って置くと、ただ荒廃しただけになってしまいます。100年200年先にどうなっているかを意識して対応すべきでしょう。「気候変動」は温暖化という

キャッチフレーズを得て、浸透しましたが、生物多様性は市民の共感を得るのが難しい課題です。里山は、多様性が重要で、人もともに、いのちのにぎわいのなかに入っていきやり方が良いと思います。文化的側面も重要です。

原：

人口減少の時代に入りましたが、里山保全、生物多様性保全を、各人が自覚して行動に移して行けば、里山もいのちでにぎわっていくでしょう。現場で行動に移して行きましょう。